

サクラマス・ヤマメ (サケ科)



サクラマスとヤマメは分類学的には同種であり、海や湖で成長するものがサクラマス（降海型、写真1）、河川で成長するものがヤマメ（陸封型、写真上段）と呼ばれている。サクラマス種群と呼ぶこともある。

茨城県にはいわゆるヤマメのほかに、“無紋ヤマメ、無斑ヤマメ”と呼ばれる地域個体群が分布している（写真2）。かつてはイワメと呼ばれたものである。イワメは日本各地から報告されているが、これらはアマゴないしヤマメの突然変異であることが明らかになっている。したがってイワメという魚類は存在しない。しかしながら本県の無紋ヤマメは非常に貴重な地域個体群であるとともに生息数も少ないことから茨城県版レッドデータブックにおいて絶滅危惧種に選定されている。

学名：*Oncorhynchus masou masou*

別名：ヤマベ、ヤモ

大きさ：サクラマスで約 60 cm、ヤマメで約 30 cm



写真1: 久慈川河口近くの海域で採集されたサクラマス（体長 39 cm）。



写真2: 無紋ヤマメ（手前）とヤマメ。

特徴：河川生活期のサクラマスやヤマメは、背側が濃い青緑色で、体側は銀白色を呈する。体側には楕円形の暗色斑（パーマーク）がある。また背中には小さな黒点がある。

降海を始めたサクラマスや降った後のサクラマスにはパーマークがない。これらは銀毛（ぎんけ）やスマルトと呼ばれる。本県には基本的には分布していないが、類似種のアマゴには朱点があることでヤマメとは容易に識別できる。

国内の分布：サクラマスおよびヤマメは北海道や本州の酒匂川以北および日本海側全域，瀬戸内海側を除く九州の日本海側に分布している。無紋ヤマメは神奈川県，茨城県から知られる。なお，無紋アマゴは大分県や愛媛県，三重県，岐阜県から知られる。

県内の分布：那珂川以北の山間地域の河川に広く分布している。ただし，移殖放流などの影響により，多くの河川で在来個体群との交雑が進んでいると考えられる。

無紋ヤマメは県北地域の一部の河川にヤマメと混生している。最近の無紋ヤマメの出現比率はおよそ5%となっている（山口，未発表）。ただし，継代飼育された無紋ヤマメが過去に数回放流されているため，出現比率5%という数字は人の手が加わらない場合とは異なると考えられる。

県内での生態：県北地域での産卵期は10月上旬から11月上旬。主な餌生物は水生昆虫や落下昆虫である。無紋ヤマメの生態は普通のヤマメと変わらないが，飼育下での成長は普通のヤマメよりもやや劣っている。また，ヤマメに比べ無紋ヤマメは体表の粘液質が多い。2006年に天然分布域から採捕した有斑ヤマメと無斑ヤマメの交配実験を行ったところ，有斑ヤマメのおよそ16%が無斑型の遺伝子を保有していることが確認された（山口・佐藤，未発表）。

備考：1975年に開設された茨城県内水面水産試験場里美養魚場では，群馬県内水面水産試験場箱島分場で飼育されていたヤマメを基に1976年から種苗生産が行われた。群馬県産のヤマメは銀毛化しない個体の割合が高く，それを基に生産した種苗は養殖業者などから高い評価を得ていた。

1979年からは無紋ヤマメの研究に取り組み，1986年からは無紋ヤマメの種苗生産も行われた。無紋ヤマメが生息する河川ではアンモニアが検出されるなど生息環境が悪化する状況にあったため，同年から継代保存も行われている。無紋ヤマメは茨城県版レッドデータブックにおいて絶滅が危惧される魚に選定されている。絶滅することがないように細心の注意でこの魚を保護し，生息環境を保全，改善することが今後も望まれる。なお，ヤマメは環境省のレッドリストにおいて準絶滅危惧に選定されている。

主な文献：

位田俊臣（1982）茨城県の無紋ヤマメについて．淡水魚増刊，ヤマメ・アマゴ特集．淡水魚保護協会，大阪．pp. 112-114.

山内 晃（1982）イワメの人工ふ化とイワメ×アマゴの交配実験を終わって．淡水魚増刊，ヤマメ・アマゴ特集．淡水魚保護協会，大阪．pp. 119-124.



写真：体長約2 cmの無紋ヤマメの仔魚。